

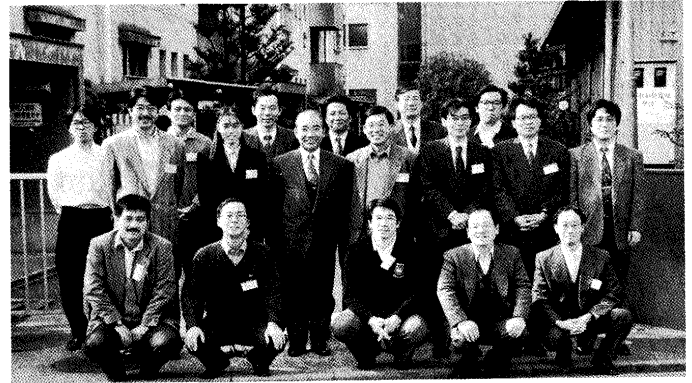
行っている。特に質疑応答には十分時間を取り、参加者の大半が発言する機会をもつように心がけている。統一テーマの選定については、多様な材料に共通する現象や、多様な材料が関係する応用分野となるよう、参加者からのアンケート結果も考慮して決定している。これまで取り上げたテーマは以下のようである。

- 1990年度 「複合材料」
- 1991年度 「環境・資源問題と材料のかかわり」
- 1992年度 「材料の表面改質・表面コーティング」
- 1993年度 「エネルギー関連材料」

93年度の講演題目の一部を紹介すると「水素エネルギー関連材料」(清水・大同特殊鋼)、「太陽電池関連材料」(曾我・名工大)、「熱電材料」(岡林・イムラ材料開発研究所)、「燃料電池」(深見・小野田)、「火力発電用ボイラー材料」(杉田・中部電力)、「高温超伝導」(岡・イムラ)、「メタノールエンジン」(塚崎・トヨタ)、「常温核融合」(大井・イムラ)、等であり、多様な材料を対象にしていることが理解いただけると思う。

研究会には毎回30~60人の参加があるが、参加者から「新しい情報が入手できた」、「異なる分野の話が聞けて参考になった」、「共通の問題で討論できた」、「知り合いがたくさんできた」、「肩の凝らない会で自由に質問ができた」等のご意見をいただくと、会の目的が達成されつつあるという気がする。

若手材料研究会の運営が安定して行われているのも幹事の方々の努力と幹事会社のご理解のたまものである。現在の幹事



第12回研究会を終えて(平成5年11月26日、住軽金稲永研修センターにて)

会の構成は大学関係では豊橋技科大、名大、名工大、企業関係は愛知製鋼、新日鐵、住軽金、大同特殊鋼、トピー工業、トヨタである。

東海支部に若手材料研究会が誕生して満4年が経とうとしている。手探りで始めた研究会も回を重ねる毎に、はっきりとした存在価値を持ち軌道にのってきている。これまでこの研究会に温かいご支持をくださいました諸先生、諸先輩、企業の方々に心から感謝致します。また今後の若手材料研究会の活動に対して支部内外の皆様のご積極的なご支援とご参加をお願いいたします。



若手冶金エンジニア研究会の活動

山村 英明

(新日本製鐵(株)名古屋技術研究部)

本会は、昭和55年(1980年)に「若手エンジニア交流会」として発足した。発足以来、今日まで、東海地区の鉄冶金関連の大学などの研究機関・企業の中堅・若手の研究者や技術者たちが参加、運営にあたっている。会の活動は、毎年1回夏に開催される研究会と年に数回、全国各地から講師を招いて開催される講演会である。

本会の活動の中でも、夏に開催される1泊2日の研究会は大きな比重を占めるものである。これは開催幹事を東海地区の鉄鋼メーカーの持ち回りで行い、企業・大学の若手エンジニア・研究者(東海支部に限らず他の支部会員の参加も歓迎している)が泊まり込みで研究発表、講演・講義、懇親会にフランクな議論を交わすことのできる、ユニークな研究会である。若手のエンジニアが集まる点では鉄鋼工学セミナーに似ているが、企業・大学を問わず自らが若手と思うものは参加できること、参加回数に制限がないこと、講師と受講者という区別のないこと、参加人数が30名程度と少人数であることが特徴である。このような運営を行うことで形式張らずに自由に意見が言える雰囲気醸成され、技術論にとどまらず教育、経済、環境問題等種々の話題をフランクに議論できる場となっている。また、この会への参加をきっかけとして研究会以外でも交流を保ち、東海地区の各企業、各大学とが良好な関係を保つ理由の一つになっている。

研究会の内容は研究発表、講演・講義、懇親会からなり、この会でもアフターファイブの懇親会が大きな意味を持つことは

言うまでもないが、講演・講義や研究発表も決しておろそかにしておらず、活性化を図るために常に内容の見直しを行っている。平成2年度からはこれまでの講演に代えて大学の先生による基礎の講義を行い、錆び付いた企業エンジニアの頭に油をさしてもらっている。一方、各社の最新技術の紹介となっていた最近の研究発表は内容も高度となり、鉄鋼メーカーでも高炉、電炉普通鋼、電炉特殊鋼でそれぞれプロセスが異なり、大学でも鉄冶金のみを扱う研究室が少なくなってきた。共通の議論ができにくくなってきた。そこで、昨年は企業・大学で共通して問題意識が高く、参加者全員が議論に参加しやすいテーマで研究発表することとし、スクラップ問題を取り上げた。これでは例年にも増して活発な議論が行われ、この試みは参加者に好評であった。今後もこのような共通課題をテーマとして取り上げていくことが必要である。また、研究会の最後に行われる反省会では、ユーザーや周辺技術メーカーの技術者との交流を行いたい、各社の製造プロセスを見たいという要望も多く、活性化のためには取り込んでいかなければならないだろう。

鉄鋼メーカーでは製造プロセスが多様化し、大学でも鉄から材料全般にわたる研究に様変わりしている。そのため企業の課題の重要性や大学の研究の意義が十分に伝わり難くなってきており、次世紀まで鉄鋼メーカーと大学とがこれまでのような関係を維持していくことは易しいことではない。このような状況において次世代を担う若いエンジニアと研究者とがフランクに議論ができるこの研究会の意義は大きい。そのため単なる研究発表にとどまらず、いままで以上に企業の抱えている課題の本質や大学での研究の発展性について自由に議論する場としてこの研究会を発展させ、企業と大学の橋渡しを行って次世代を担う技術の芽を芽生えさせるような場としたい。